

北海道  
札幌

徳辰科  
大谷子

八田三郎  
親



四月十九日

東京市日本橋區西河岸町六番地

島平  
旅館

平野平四郎

電話本局

特長 八番

長一三八一

晴亭先生

あはれ十七の巻  
此の様にあ見候  
昨年帝正あてに  
各々さうりり宿願  
のあり奉り候  
得具體的に  
即ち多志轉る人  
の確定申上り  
この印刷銀行の  
号の地あり其  
十三頁に  
見書更正印刷  
東京とて  
何ふ一  
巻の集  
中

東京にて秘する事と云

何れ一撃の中身の諷

意の集をたれを中

認論より実行主義

理底より実行主義

何れも彼れも極

むよこの方針

懸絶此れを隨

つらい者いふ事

何れも諷の事

この口の體

か一毒大中の時

この口を

抱く成らぬ

此れ申上る事

此れ後ある事

此に申上るる此の故の

美入為る所なりと見取

向ふ一たる所キナナ

人より思ひ成る心業

外おつやヤンこ御

界し時福原男が

厄付者探者申上る

と極ぬた

少生を今暇九時の

別あるや時改草を

其書教曰く清在茶

う確おらる、笑止

昨日日光こし申福さ

登り本口を是か神

腰が補之實と一寸困

う 確めらるゝ、笑ふ

昨日日光こし中禱さ

登り本らふ是か禱み

腰が禱之實と一寸困

惚保し形んた弱い

うと云ふのか強急坂

早朝より麓土を襲

びたり上果たふと朝

と大方禱考のため

末知就眠中と察し

此今(午前九時前)に電話

したるを此に已に外

出づとのるりこ路入

りたりと申せられ

小生曰く所の位の旅

したるに...

此の如くこの...

りたりと申され

お生白く河の位の旅

行を何と申さる

心と申すは實に

山の際をいふ事

と舞りたるも

申すはより實を

とんかと思はる位

と申す事と乞ふ

少生解政好車に

活動あはれ先を

と申す事

向ふ事

午時

時

心志と申上る實聲

山の際を此生先車

と舞りたるもまれば

中途より實を引返入

と見えぬ思ひたる位

と云ふ実事と乞ふ

少生帰政後車に

活動する此先を

と申すも

甲子年

午月

初七日

田舎